編集長から

精神医療は医療なのか

増田　一世

やどかり出版が主催している事業の１つに「体験発表会」がある．もともと全国各地に講演に出かけるやどかりの里のメンバーたちが，講師としての研修が欠かせないと学習会を発足させた．それが新聞に取り上げられたことなどを契機に，近隣の方々や関係機関にも声をかけるようになった．現在では，自分たちの生きざまを語ることで，参加してくださる方との心の交流ができることを目指している．

精神病院を担う働き手として

17回目（６月24日開催）の発表者は辰村泰治さんだった．辰村さんは大学在学中に発病して，以来40年がたつ．そのうちの22年間はやどかりの里から歩いて15分ほどのところにある民間の総合病院の精神科病棟にいた．今回はその22年間の精神病棟での日々の一端が語られた．私は彼の話に耳を傾けつつ，一体何の話を聞いているのかと釈然としない気持ちが続いた．

辰村さんは胃潰瘍と椎間板ヘルニアの治療をその病院の一般病棟で受けている．椎間板ヘルニアの治療の途中で精神病棟に移された．体が不自由なときにトイレの介助者は看護者ではなく，同じ患者仲間であった．椎間板ヘルニアのリハビリのために通ったリハビリ室の手伝いを，回復後看護助手に指導されながら一緒に行っていた．その後，病棟内の掃除を頼まれて，暑い時も寒い時も毎朝４時半には起きて，ホールの床拭きまでやった．病棟内で内職をやって，その報酬の菓子パンやインスタントの焼きそばが提供された．週に２回の風呂掃除，毎朝の給食室の手伝い，また看護士の都合で給食室の手伝いが阻まれそうになったこともある．辰村さんは治療費を払いつつ，精神病院で働いていたのだ．

民度の低い埼玉県だから……

そして，さらに私が衝撃を受けたのは，精神障害者の生活支援活動を展開するやどかりの里の存在を，彼が退院の６か月前までまったく知らなかったことである．私は辰村さんが入院したころ，やどかりの里で働き始め，出版活動に従事するようになった．情報を伝達することを仕事としながら，最も近くの人たちに情報は何ら届いていなかったのだ．一体何をやってきたのだろうかと忸怩たる思いになった．

埼玉県は民度が低いから，退院しても住むところや働く場所がなくて苦労しますよ．それよりも入院していたほうがいいですよと言われ，生涯を病院で過ごすことを覚悟していた辰村さんは，昨年の２月に退院した．

「はっきり言いますとね．世の中変わってきているんです．法律が変わって，患者を長いこと入院させておくと，医療費が削られて，病院の儲けが少なくなるんです」

精神医療の主人公は誰なのか

精神医療は大切なサービスである．そして，精神医療が1つのサービスである以上，サービスを受ける人がそのサービスの主人公のはずである．精神医療にサービスの受け手の声が反映され，安心して利用できる医療サービスが提供されるために，私たちは何をしていったらいいのだろうか．他人事ではない，私たち１人１人の問題なのだ．